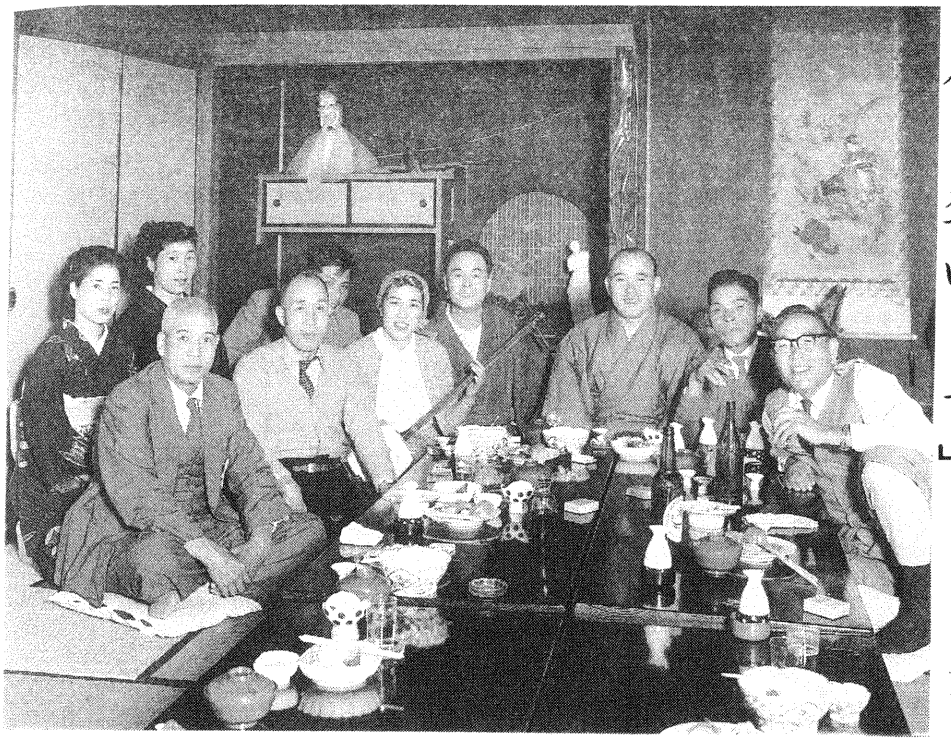
写真で見る浪曲人生

春日井梅鶯

第三回

「酒は人を救いもするし、命も奪います」

文・おさだ衛



かすがい・ばいおう　本名・安藤和子。昭和２年９月２日うまれ。父の初代春日井梅鶯の浪曲に感動し、父に入門。昭和26年、春日井加寿子(かずこ)としてデビュー。昭和50年、二代目梅鶯を襲名。現在、日本浪曲協会の副会長。写真は昭和30年当時の宴会の模様。中央が初代梅鶯。左は名曲師・松下信太郎。その左が三味線を持つ春日井加寿子。

飲む打つ買うは男の三道楽。浪曲界には女性でも飲む方の豪傑が少なくない。先代も現・梅鶯師も名だたる酒豪だった。今回はお酒について聞いた。

「私も最初はまったく飲めなかったんですよ。昭和26年、春日井加寿子でデビューして父と二枚看板で全国を巡業しました。巡業の初めの一週間で声が出なくなりました。父には声を張れ、声を張れといわれて無理をしたんです。

声が出ないと父にいいましたら、今夜、酒を飲め、です。酒は消毒だから体に良いというのです。

その晩、おちょこ一杯のんだら、貧血で倒れましたよ。ですけど、気のせいか、翌日から声が出ましたね。父は、昼は番茶に塩を入れてウガイをしろと。それも効き目がありましたね。

お酒はおちょこ一杯から二杯、三杯と重なって行きました。父の血を継いでいたんですね。

父のお酒は豪快でした。お銚子がずらっと並びました。飲まないときは寡黙で、じっと物思いにふける人でした。飲みはじめると陽気になります。昔の苦労ばなしや芸談が始まります。最後は泣き上戸になりました。父には結婚ができなかった身体の弱い妹がいて、その妹がかわいそうだと必ず泣きました。父は死ぬまで飲んで、酒に命を取られました。酒を飲むと肴を食べなかったので、よけい悪かったんでしょう。

巡業は北海道から九州まで回りました。興行は夜の6時から始まり、はねるのが10時ころ。それから宴会です。父が主役の宴会ですから、宴会の主催者や地方の名士が父に酒を注ぎにきます。父はうけるんですが、私は翌日の舞台のこともあるし心配で、父にはそう勧めないでくださいと、みなさんにお願いします。そうすると、じゃあお嬢に注ぐわときて、私もいい気になって盃を引き受けて飲みました。宴会は毎日でしたね。

それでも酒は殺して飲んでいました。父から、女は毅然としろ、酔っ払

昭和12年、養命酒の宣伝。「父はこの頃、巡業から東京に帰るとレコードの吹き込み、夜は大森の料亭に行って朝帰りという日々でした」

いは大嫌いだといわれていたのです。夜、寝るまえに酒をもどして朝は水をたくさん飲んで、父の前では、しゃきっとしていましたよ。

いつしか、私も一升酒が飲めるようになっていました。昭和30年ころ、東海道を一週間まわる仕事がありました。メンバーは天津羽衣さん、春野百合子さん、富士月の栄さん、三門お染さんと私でした。お染さんは飲めないんですが他のみなさんは横綱級。毎晩、朝まで飲みましたね。話題は舞台から化粧のこと、お酒のこと。アハハ、オホホでぐいぐい飲みました。関西のお二人は話が面白いんです。春野さんが『今晩は無礼講でいきましょう』というと羽衣さんは『いいですよ、どうぞ』なんて。羽衣さんは一番の先輩でしたが『お姫様』なので、お話は面白くなかったわね。

羽衣さんと私は五分と五分の姉妹分でした。羽衣さんは『加寿子さんは学問の大学を出たけど私は浪曲の大学を出たのよ』といっていました。

羽衣さんは一歳とし下ですが昭和57年、54歳の若さで亡くなりました。肝硬変です。これもお酒が原因でしょう、病床にあってもお酒を口にしていました。お見舞いにいったら『私は苦労を知らなかった。わがままいわないから、これからは仲良くしてね』という言葉が耳に残っています。

そういう私もストレスと心労で心臓を病みました。昭和63年にカテーテルの手術をして、今は大丈夫ですが、お酒の飲みすぎも病気の一因ですね。

酒は人を救いもし命も奪います。お酒は今は、お銚子一本だけです。でもね、お酒は苦労を忘れさせ一日を明るくしてくれる尊い蜜（みつ）ですよ、私にとっては」

昭和37年の浅草・国際劇場。「私の隣の二葉百合子さんは東百合（とうゆり）と呼ばれていました。西の百合、さいゆりは春野百合子さんです。いける口の春野さんと違って二葉さんは飲めない方でした。とても芸熱心で、雲月調から関東節になって、現在の名声を築いたんですね」

昭和58年、山梨県富士吉田にて。梅鶯師の隣は浪曲評論家の故・芝清之。「当時は心臓をわずらっていたのでお酒は飲んでいません。父には宴会で唄はうたうな、芸者じゃないんだからといわれ、今でも宴会では唄わないんです」

東京・中野公会堂。左は玉川勝太郎、右は佃雪舟（つくだ・せっしゅう）。「勝太郎さんは飲みません。雪舟さんはうちの座員でもありました。ケレン読みでお酒も人一倍にぎやかでした」

49/52

声　こえ　KOE

「浪曲に興味を持っています」

私は中古レコード店に勤めている35歳の男であります。今までじっくりと浪曲を聞く機会にめぐまれず、今日にいたっておるわけですが、最近仕事で車に乗っておりましたところ、いつも聞いているMBSがマラソン中継なんぞをやっておりましたので、他局へダイアルをあわせましたら浪曲が流れてまいりました……いやあ、聞き入ってしまいました。絶妙の節回し、語り、三味線とのからみ……いざクライマックスへ！という時に目的地に到着してしまい、すでに遅刻していた私は、後ろ髪を引かれる思いで車を降りました……。このような事が後日もう一度ありまして、結局、どなたの何という題目だったのかもわからずじまいです。そこで、もしよろしければ、お教え願えないかとメールを送らせていただいた次第です。

一つ目は、氾濫した川を、人助けのため馬で渡るというものでした。二つ目は、跡取りの座をかけて3人の男が、その家の娘と剣術で勝負する事になりましたが、そのうちの一人が「婦女子と剣をまじえる事はできん」と辞退するといった話でした。　三池淳司

編集部より　一つ目の話というのは『隅田川乗っ切り』でしょうか。しかし『乗っ切り』の場合は、度胸試しのために川を渡るのですが……。二つ目の話は富士琴路が演じている『恋と武士』です。以上メールを送りました。